

神隠しの意味，不安夢からの脱出

－“千と千尋の神隠し”の心理学的考察－

松 本 行 弘

〔はじめに〕

『千と千尋の神隠し』は，2001年，宮崎駿が，『もののけ姫』から4年を経て発表したアニメーションである。2002年に第56回毎日映画コンクールにおいて“日本映画大賞”をはじめ“監督賞”など5部門を受賞した。映画として最も優れたものであると評価され，今回を含め彼の作品は3度受賞している。監督賞は初めてであるが，選考会では，黒沢明に匹敵する日本映画の監督である，また，本作こそ宮崎駿の芸術の集大成と絶賛された。また，第52回ベルリン映画祭で最高賞に当たる金熊賞を受賞し，「地域性に富んだものこそ，世界に通用すると思っている」という作者の言に見られるように世界的な共感を得た。更に，第25回日本アカデミー賞では最優秀作品賞を獲得した。

筆者は以前『もののけ姫』を“父親不在状況での男性性獲得”というテーマで心理学的観点から考察を行った^{注1}。今回の『千と千尋の神隠し』も“神隠しの意味，不安夢からの脱出”をテーマとして心理学的に分析し考察を加えることにする。

〔物語分析〕

I. プロローグ（少女千尋）

まず，この物語を心理学的に解釈し考察する時，一つの前提として“物語全体が10才の少女の見た『夢』である”という仮説を立てることにする。

1. 引っ越し

物語はピンクの花束を持って後部座席に座る主人公“千尋”と呼ばれる少女から始まる。両親が運転する車で引っ越し先に向かう車内の場面である。

今までは都会のマンション住まいから学校に通う少女であったが、これから郊外の一戸建てに転居するのである。千尋は学校でのお別れ会でプレゼントされた“ちひろ、元気でね。また会おうね”というメッセージカードの付いた花束を握り締め寝転がったりしているが、余り楽しそうではない。それは、旅行のような晴れ晴れとした気分とは違っているからである。引っ越しを計画したのは両親であり、両親の生き生きとした前向きの気分と千尋の不安気な気分とは対称的である。両親に迷いはない、全てが明るい。しかし、平凡でどちらかと言えば不器用で子供っぽい女の子の様子からは、どこか何とも言えない暗さが伝わって来る。

この不安な気分が引き金となって10才の女児童を夢の世界に誘い込み、この不安がイメージを生み物語の展開になって行くのである。

Ⅱ. 夢の世界へ

ストーリーでは映像が連続しているが、この自動車の後部座席で寝転がっている間に本当に眠ってしまうのである。その眠りの中で、“引っ越しに伴う不安”が引きがねになって『夢』を見る、その『夢』が“神隠し”という冒険物語なのである。この仮説を下敷きにして物語を解釈してみようと思う。

1. 異風の門

引っ越し先の家は、崖の上に立つ青い家で、(両親が目標としてきた)人生の高みに立つ(建つ)ことを象徴しているかのように感じさせる。そして、父親が道を間違えたことで、道一つ隔てたところに、それとは背中合わせに存在している全く別の世界に踏み込むことになった。そこには、鳥居と石の祠があり、それは昔の古い信仰の跡であり、普段は思い出さないような心の奥深い過去の世界(古い外傷体験など)にも繋がるような、異界への入り口を暗示している。蒼古とした石像は意識の奥に潜む世界へと導く、これからの体験への道

標と考えられる。不安感はさらに高まり、千尋にはそれが感じられ、何とも言われぬ寒気のような不気味さと落ち着きなさを覚える。一方、自信家である父親は、自分の知識や行動力を頼りに家族を引っ張って行く。自分の判断や推測など意識の合理性を信じて疑わず、非常に楽天的で出たところ勝負の性格を示している。

ついに異次元の世界へ入る門に至るのである。車止めの彫物はその標識であり、ただでは済まない警告でもある。千尋はトンネルを前にして、その先にある異様さを感じるのである。大人である両親は今までの知識や経験で状況を判断するが、10才の少女である千尋はごく自然に自分の感覚でその異様さを感じ取る。これは、大人になるにつれ徐々に失ってしまうようなものかも知れない。

2. トンネルの向う側

トンネルの向こう側の世界を、父親は自分の知識で判断した“テーマパークの跡”という思い込み（知的判断）を信じて前進する。もはや五感を働かせた感覚的判断は後退し、非常に自己肯定的な状況判断によって対処して行く。これは両親の日頃の社会適応パターンと推測される。一方、千尋は音や肌に触れて行く風のそよぎに素直に反応し、普段意識の外にあるようなものがチラチラと意識をかすめ、“誰も居ないのに居るような”雰囲気の様相に気付いている。

三人は不思議な町にやってくる。そこで、空腹を覚えた両親は回りの異様さに気付くことなく、自分たちの文明社会をそのまま当て嵌めて、自分の欲望の儘に無断で食堂に入り、空腹を満たそうとする。ここでは食欲という欲に負ける両親（後にそのしっぺ返しがあるのだが）とその不気味さ故に引き返そうとする千尋との差が見られた。

両親にとっては時間は連続性を保っているが、千尋には意識はされていないものの、異界に入った時間の断絶が感じられているのである。

“鬼”“呪”“むし”“飢○食”“長虫”“へび”といった食堂街の看板に象徴されるイメージは普段目を背け、無意識下に仕舞い込まれているような、見たくない関わりたくないものの象徴で、この世界が異界であることを映像で訴え

ており、夢に現れた薄気味悪さを示している。

ついに物語の中心場面となる油屋にやって来るが、その印象は、不気味というよりは不思議な感じで、子供の好奇心をくすぐるに十分である。建物は決して現代風ではなく写真や旅行で見たことのある古い神社や寺のイメージを抱かせ、懐かしいような無意識の深い部分に触れるような感覚を蘇らせる。

そこに、平安時代の水干すいかんのような装束をした、千尋よりも年上と思われる、おかっぱ頭の少年が現れる。その言葉からこの場所は千尋の来る、また居る場所ではないらしいことがわかる。それは子供だからか、人間だからか、危ない場所だからか、どういう理由によるものか今は不明で秘密めいている。この少年は、夜になることを警告した。夜は魍魎魍魎が跋扈する闇の世界であり、人の無意識界に匹敵する。川の向こうの昼間の世界、明るい自我の活躍する意識の世界に帰るように言うのである。ということは、この少年は無意識界に繋がる魔物の化身であるかもしれないことになる。

3. 少年ハクと豚になった父と母

千尋が両親が食事をしている店に戻ると、二頭の豚が盛んに食事をしている。二頭の豚は食欲に負けた両親の変わり果てた姿であり、人としてのプライドも失い、その欲は我を忘れ自分の子供も忘れるくらいに果てしが無い。もはや人ではない、欲望そのものであることを示し、果てしのない欲望が身を滅ぼすことの証明である。

少年が帰るように警告した川は、草原が大川に変わり、時刻も夜の世界になってしまっている。川に橋はなく意識の世界から引き離され、自分ではコントロール出来ない無意識の世界、千尋が「覚めろ」と言っている“夢”の世界に残されたのである。この物語が初めに夢を描いたものと仮定した観点から言うなら、実際に人は夢の中で怖い思いや嫌なめに遭った時には、「これは夢だ早く目覚めてくれ」と思う体験はよくあることである。

その結果、少年によって、千尋ははっきりとこの世界と川向こうの世界は違う世界であることを認識させられる。こちらの世界で生き延びるには、こちらの世界を受け入れ馴染まねばならない。自分をしっかり持つことの第一歩であ

る。一方では、どうも両親は豚になったような感じがして確かめずにはおれない。少年は術を使う。暗示を利用した催眠術か。やはり魔物の化身であろうか。名前は“ハク”と分かる。また、少年とは別に異形ではあるがそれほど怖くも恐ろしくもなく少し滑稽な魔物がぞろぞろと現れる。これは夢の仕業であり、千尋の発達年齢に見合った精神世界から生まれたもの（イメージ）と思われる。どうもこの世界は人間の世界ではないらしい。人間は入れない世界なのか。実際に、入るためには息を止めて人間臭さを出さないことであった。人間臭さが嫌われる理由は後に判る。

千尋は少年ハクに助けられて、この世界（油屋）に潜り込むことができたが、次に、二つの課題が与えられたことになる。“ここで生き延びること”と“豚にされた両親を救い出すこと”である。第一の課題は、ここでの義務を果たすこと、つまり人であり続けるためには仕事を見付け働かなければならない、また見付け出すためには勇気と忍耐がいることを学ばねばならない。よく子供が言う、そしていままで千尋が住んでいた世界で言っていた「イヤだ。帰りたい」ということは言えない。そして第二の課題として、それをやり遂げることによって両親を救うこと、家族を取り戻すことになる。社会に少しだけ目を開くのである。この世界が、両親を豚にした湯婆婆という魔女に支配されていることを知ると共に怠惰が許されないことを覚悟するのである。“ハク”とは一体何者なのか。不思議なことに千尋を昔から知っており、千尋の味方だと言う。千尋とハクに、過去という時間の流れの中で出会いがあったのであろうか。

Ⅲ. 魔女の契約

遂に、千尋は自分が人間であり続けるために、決心して油屋のボイラー番釜爺に会いに行くべく行動を起こす。ただ、10才の女の子である千尋には言葉で聴覚的にオリエンテーションをつけて釜爺の所へ行くのは無理であることを知っていたハクはここでも術を使って視覚的に映像で教える。千尋の冒険が始まるのである。

1. お湯屋

釜場はエネルギーの源であり、油屋の心臓部と言ってもよい。そこで生み出される湯は薬湯となって癒しに使われるのである。油屋は湯屋、つまり大きな風呂屋であることが分かる。釜爺は働き者だが風呂釜にこき使われて休む間もない。6本足がその象徴である。仕事を求めてきた千尋に対して「仕事はない」と断るが、釜爺は案外優しい人物かも知れない。働いたことのない千尋に、働くことのルールを教える、“やり始めたら最後までやり遂げる”こと、“ルールを外れて、一時の思い込みで助けようとして人の仕事に手を出さない”，それは一見助けているようで相手を蔑ろにすることになる。

そこにリンという湯女が現れる。リンは人間の姿をしているが、ハクと同じで人間臭くない。釜爺は、千尋の持っている素朴さやドンクサさ、あるいは駆け引きのない素直さに気付いて優しく、どっちみち“働くには湯婆婆と契約を結ばなくてはならない”ことを教える。ここで生き延びるにはこの世界を支配している魔女と交渉しなくてはならないという最大の課題に行き当たるのである。そして、リンに湯婆婆の所まで案内してもらい、その後は釜爺が言うように「自分でやるだろう」「自分で行って、運を試しな」ということで、自力で運命を切り開かなくてはならないことになったのである。この時、リンから“人に教えを受けるときには返事と挨拶がきちっとできないといけない”，また“世話になった時もお礼を言わなければならない”という社会的な礼儀を教えられるのである。このようにして千尋は徐々に人と接する時の社会的な力を蓄えるようになっていく。

2. 湯婆婆の誓い

湯婆婆の住む“天”階は良く整理され一見合理的世界のように見えるが、情の薄い人間離れした不合理さが謎のように潜んでいる。千尋はここでも自分の世間知らずから扉のノッカーにさえも馬鹿にされる。そしていよいよこの世界の元締め魔女と対面することになる。魔女は、まず自分の魔力を千尋に見せることで脅し、気持ちを支配しようとする。また、ここが八百万の神々の癒しの場所であることを説明し、はっきりと親を豚にしたことを認める。そして、

さすがに魔女は千尋の本質を衝いて、“グスで、甘ったれ、泣き虫、頭の悪い小娘”と決め付ける。この事は裏を返せば、千尋が直面する自分自身の課題である。他人に頼らず、自分の決断で実行し、弱音を吐かない、利口さを身に付けることである。まず、この魔女の脅迫に負けないことである。

八百万の神の癒し場所であることから人間は忌み嫌われる。そして働く契約によって人間臭さを取ることで、この世界に生きることができる。

湯婆婆は働かせる気がなかったが何か苦手のものがあるらしく、それに気を取られて「働かせてくれ」という千尋に負け、自分で誓ったように契約を結ぶ。ただこのとき、「イヤだとか、帰りたい」とかは言わないことを念押しする。

3. 千尋が千になる

千尋は契約書に署名する。契約と引き換えに自分の名前を引き渡し、“千”として湯屋の者となる。この事は人間千尋が非人間的な千になることを示している。そして、この世界で生き延びることはこれで可能になったが、果たして人間として生きて行けるのかどうか。再び千尋に戻ることができるのだろうか。しかし、まずは第一の課題の“ここで生き延びること”は達成され、次に豚になった両親を救い出すという課題を達成するまで、湯屋で働くことになる。

ハクが呼ばれ千の世話をするように命じられる。湯婆婆に接するハクと自分だけに接するときのハクとがあまりに違うことを千は理解できない。これは、この年齢の児童には、物事に本音と建前の使い分けがあることを理解できないことからくる疑問である。逆にハクはその使い分けが出来るくらいの社会的な発達段階に達していることになる。それは再会したリンの態度にもみられることである。

結局、リンの手下となって働くことになり、千の機転の利かなさが反って、周りに助けてやろうという気を起こさせるのではないかと思われる。リンによれば、ハクは湯婆婆の手先ということになり、何か理由があることが暗示される。

千はハクによって本当に豚にされた両親に会うが、両親は全く豚になり切っており、このままではこの世界で生き延びることが出来ないし、人間に戻るこ

とも出来ないことになる。この現実には10才の少女にとって余りにも重いものであった。ハクが人間に戻るために“名前”がいかに大切かを言って聞かせ、人間であったときの服を返してくれ、千は自分の名を思い出す。自分の服を取り戻し、人間であることを忘れないために湯屋の服の下に着込む。この名前を忘れないことと人間の服を着るという行為が後に魔法の世界からの脱出に役立つことになるのである。一方、ハク自身は自分の名は思い出せず、元の自分に戻ることは出来ないのだろうか。

千はハクと別れた後、天に登っていく白竜を見る。白竜は一体何なのか。一方で、カオナシがそっと千にくっついて油屋に侵入する。

一混乱ありそうな気配である。

4. オクサレ神騒動

油屋は湯治場で、浮世の疲れをとる場所である。額の“後楽”はそれを象徴している。カオナシが番台を通さず、千にくっついてその湯屋に忍び込む。湯婆婆が、“ロクでもないもの”と断じる、湯屋の客でもなく神でもないカオナシとは一体何なのだろうか？カオナシにはほとんど表情がなく、喋れない。

リンと千は湯屋で一番手強い、一番汚れた神が浸かる大湯の番をさせられる。それは浮世の苦悩を一身に引き受けた神の心と体を癒すという仕事である。カオナシは薬湯の注文札が必要で困っている千を助け、千が喜んだことから、更に喜ばそうと無断で大量に札を持って来るが、千は断り、自分に必要なこと以上のものは望まない。カオナシにはそれが分からないようである。

湯婆婆は魔法の力で湯屋を経営し、その性は強欲で果てしない金銭欲をもつことから、従業員も欲に聡い。お金になれば客を選ばない。嫌われ者のオクサレガミでも欲の種にする。結果的に、千がこの嫌われ者を任され、自分の勤めとして受入れる。千には任されてしなければならないと分かったときには、多少ドジでも正面から取り組む勤勉さや一途なところがある。それが千を救うのである。そして、湯婆婆はこのオクサレ様がただのクサレガミではないことを見破る。それは千の好奇心と機転によるもので、オクサレ様の正体は“名のある河の主”であることが分かり、人間によって川に投げ入れられたゴミ芥によっ

て河の主が病んでいて、つまり、ゴミ芥は人間の欲の象徴であり、果てしのない欲によって身も心も病んでいることを示す。この湯屋は人間の欲望を一身に引き受け、振り回され傷付き痛み付けられた八百万の神々が癒しを求め清められる場所なのである。しかし、人間の欲が清められる場所ではない、困って人間臭さは忌み嫌われるのである。オクサレ神が癒された時、ゴミ芥に象徴される人間のかつての欲望があらわになり、それに混じった砂金が新たな欲望を生み出す、一方、千には不思議なダンゴが残される。身も心も癒され満足した“河の神”は“後楽”の額が掛かった大戸から出て行き、千は自分の役割を無事果たした。めったに褒めたりしない湯婆婆から褒められるが、湯婆婆の目的は砂金にあり、自分の強欲が満たされることが第一なのである。千の無欲と湯婆婆の強欲の対決の日が訪れるような予感を抱かせる。それには、湯婆婆が千の手にあるドロダンゴに気付かなかったことが暗示的である。

この騒動を見ていたカオナシは、この世界では欲が人を動かすこと、そして“金”がいかに価値のあるものであるかを知った。

千は考える。ハクは湯婆婆のために何をしているのだろうか、雨が降って海のようになった水の向こうには何があるのだろうか、川の神にもらったドロダンゴはどのような役に立つのだろうか。

カオナシは、オクサレガミ騒動で知った、金を欲しがるという“欲”を利用して、青蛙を飲み込み自分の食欲という“欲”を満たそうとする。欲は欲を呼ぶことを示している。そして、青蛙を飲み込むことによって、カオナシ自身が話すことができるようになり、手や足を得ることになった。

5. 銭婆と傷付いた竜

千は夢を見る。豚になった両親に川の神にもらったドロダンゴを食べさせれば人間に戻れるのではないかと考えて食べさせようとするが、どれが父と母の豚か見分けがつかず困惑の中で目を覚ます。下の座敷では人間の欲に気付いたカオナシが客となって金をばらまいて暴食に耽っている。その時、白い竜が無数の白い鳥のようなものに追い掛けられながら現れ、千には直観的にそれが自分を助けてくれたハクであることを覚る。そして自分の方に来るように叫ぶと、

竜は部屋に飛び込んで来る。白い鳥のような物は紙で出来た無数の人型であった。竜は千を千と認めたとは思えず、離人的な感覚の中で紙の人型が出ていってしまうと竜も出て行く。千の背中に一枚の人型が張り付くが、これは一体何なのだろうか。

カオナシは千に対しても金で心を掴もうと砂金を山ほど与えようとするが、千には通じなかった。千には金よりもっと大切なものがあったのである。

この当たりから千の表情が変化する。今までとは違ったきりっとした強いもの、決断力や勇気を感じさせる。そして、それは行動となって現れ、傷付いた白竜を助けるために湯婆婆の部屋へと乗り込む。この時、紙の人型が千を助けるが、本当に人型は千の味方なのか？そして、千は湯屋とは全く別世界の部屋にやって来る。この部屋は“坊”と呼ばれる湯婆婆の子供の部屋で外界とは全く隔たった非現実的な世界である。夜と昼をコントロールでき、時間を人工化する、およそ人間的ではない魔術的な世界である。湯婆婆は外界から隔絶された無菌状態で子供を育てており、子供である坊との関係は極めて歪な印象を与える。

座敷で傍若無人の振る舞いをしているものの正体がカオナシであることを湯婆婆は見抜いた。一方、傷付いた白竜は役に立たないとして片付けられようとしている。

千は白竜を助けようとする。その時、千の背中に張り付いていた人型の正体が湯婆婆の双子の姉で、同じように魔法使いの“銭婆”で、竜に取られたハンコを取り返しにやってきたことが分かる。そして、千は銭婆から白竜が何をしたか、また何をしているかを聞き知る。銭婆は、竜の本質は優しさにあるが魔法を手に入れることの愚かさを説いて、欲と結び付くと命を落とすことになることを千に示す。この銭婆には憎めない余裕が感じられるが、千を助けることもせず、白竜を殺すこともせず、湯婆婆の取り巻きを一掃して退散する。後は、千が自力で状況を切り開き白竜（ハク）を救い、両親に再会することである。

6. 千の決心

千は白竜を救おうとして一緒に油屋の奈落に墜落して行くのだが、奈落に象

徴される暗くて深く、その底には何が蠢いているか分からない心の深みに落ちて行く時、水中に投げ出された感覚が蘇る。これは昔の古い記憶に結び付く（外傷）体験であるかも知れない。今はまだ意識の底の言語化できないイメージの世界として千に一瞬迫り、白竜が再び上昇に転じ現実の釜場に投げ出されるのである。いずれこの感覚は解き明かされることになるだろう。

白竜の苦しみを救ったのは、千が川の神からもらったドロダンゴ（ニガダンゴ）で、千の努力の報酬として手に入れた妙薬である。ハクを苦しめていたのは銭婆の所有物である“魔女の契約印”と“黒い虫”のせいであることがわかる。黒い虫は踏みつぶす。そしてハクの命を救いたい千は、いかに怖い魔女であってもハクを救うためには会ってハンコを返さなければならないと決心する。湯婆婆が以前に言ったような、千はもう甘ったれでも泣き虫でもない。自分の意思で少しは行動する少女になっていた。さらに、釜爺の話しから、不思議なことにハクもこの釜場に突然現れたという。しかし、千とは違って“魔法使いになりたい”というはっきりした目的を持っていた。そして、湯婆婆の弟子になったことから道を踏み外し、手下になってしまう。青少年の非行を見るようである。千にはまだ魔法の持つ意味が分からない児童の心性があり、逆にその心性が千を救うのである。ハクは名前を奪われ自分というものを全く失ったかのように見える。千に危害は加えないがそうかと言って親しいわけではなく、分からないままに離人的な状況で薄ぼんやりと関わりを感じている状態と考えられる。“黒い虫”は腹の虫で、いわゆる“虫の居所が悪い”や“腹の虫がおさまらない”と言う時の“あの虫”であって、その人の気持ちが、えも言われず操作されることであり、それを吐き出すことで自分の気持ちに素直になれることと解釈される。但し、それを踏みつぶしたことは縁起の悪いこと（“虫”をうまく育てられなかったこと）であり、「エンガッチョ」と悪縁を切るのである。

千は、“魔女の契約印”を返すために、いかにも魔女が住みそうな沼の底に片道だけの電車に乗ろうとする。恐れは感じない、電車がなければ歩けばよいと自分自身を信じることができる自分になった。カオナシを引き入れたこと

で、湯婆婆が怒って千を探していると聞いても特に動じない。却って年上のリンが動揺しているのが分かる。さらに、リンには解らない（ハクに対する幼い）“愛”が感じられる。千の初恋か？

千は逃げないで湯婆婆に会いにカオナシが狼藉中の座敷に行く、特に怖々というわけではない。千の心の中にはもはや止められない決心があり、そのひたむきさ、強さが見られる。それに引き換え、この期に及んでも湯婆婆は金に拘り欲から離れられない。自分の子供がネズミにされたのにも気付かない、それぐらい金の亡者になっていることを示している。一方カオナシは何故か千に拘る。この拘りは一体何か？そして、食欲や金銭欲で千を誘うが、千は関心を示さず、はっきりと「わたしの欲しいものはあなたには絶対出せない」と断る。千が欲しいことは“両親が人間に戻り、再会できること”，そして“ハクの命が助かること”である。更にカオナシに“ここに居るべきではない，この湯屋から出て行くべきだ”とはっきり言う。カオナシは両親のことを聞かれて「イヤダ」「さみしい」と顔を体埋めるぐらい激しい情緒的反応を示した。カオナシは千の気持ちを理解することができないで、更に欲に固執するのである。次に千がした行動は、自分の思い（両親を救い出すこと）を殺しても今日の前にあるカオナシの苦しみを救うことであった。そしてここでもニガダンゴが役に立った（ニガダンゴをカオナシの口に放り込む）。遂にカオナシは飲み込んだものを吐き出すのである。

IV. 魔女の贈物

1. 千、服を脱ぐ

銭婆の所へ行くために電車に乗ろうとするのだが、雨水で外は海になっており、線路も水に沈んでいる。リンが千を鹽船で送って行くが、ここで、リンが「セーン！お前の事，ドンクサイって言ったけど取り消すぞー」と叫び、千が自分の判断で行動できる少女になったことを証明した。リンには出来なかった自立的な判断，それは欲に支配されず，更にカオナシがこの湯屋に居ること自体が不幸をもたらすと考えることが出来るようになったことなどに表れている。

また、重要なことは、千が自ら湯屋の服を脱ぎ、中に着込んだ自分自身の服に着替えたことである。これは魔法からの解放を意味していると考えられ、“千”から人間としての“千尋”に自分の力でもどるのである。千尋に不安はなく、自分の行動に自信が感じられる。カオナシもネズミもハエドリもみんな千尋の側で落ち着き、少しだが他人に安らぎを与えることも出来るようになった。

2. ハクと湯婆婆の対決

その頃、ハクは釜場に横たわり釜爺の手当てを受けているが、ここに至る記憶が切れ切れで「闇の中で千尋が何度も自分を呼んだ」ということを微かに覚えているという。これは、ハクが人型に追い掛けられていた白竜であった時、千尋をきちっと認知しなかった白竜の離人的な態度に表れていた。そして、ここでハクが千を“千尋”と呼んだことから、もう千尋にかかった魔法は解けているのではないかと考えられる。

ハクは回復し、真実の见えない湯婆婆と対決する時がきた。湯婆婆はどうしても欲から離れられず、自分の強欲によって目の前に起こっている“千が親を見捨てた”という勘違いとハクによって指摘された“大切なものがすり変わっている”という事実が分からない。しかし、遂に湯婆婆も気づき、自分が作り出した“欲”に象徴される“金”が“土くれ”に返り、“坊”も“頭”の幻影であることを知る。ハクは最早湯婆婆を恐れることもなく、それは自分の欲から離れ、目の前にあるものが自分の幻影に過ぎないものであり、千尋が大切にしている（カオナシでさえ出すことができなかった）人を愛するということの大切さに気付いたからである。そのことから自分の欲に縛られた虚構の主である湯婆婆を恐れることはなくなり、自分の命を投げ出してもよいという自己犠牲に値することに気付いたのである。

3. 銭婆の贈物

最早、人に頼って行動する自分ではなくなった千尋は、自信をもって自分の道を歩み出す。千尋は銭婆の家に辿り着いた時には、人と会い、人の家を訪問した時の礼儀を身に付け、自分の気持ちに忠実で素直になっていた。その素直さが銭婆に受け入れられ、一見ドンクサそうであるが、何も企んだりせず駆け

引きのない千尋の心性が難題を解くことに繋がっていくのである。それは魔女の呪い（変な黒い虫）を踏み潰したことに象徴され、自ら魔法を解いたのである。

錢婆の話から、湯婆婆とは気の合わない双子の姉妹であること、坊と湯バードにかけた湯婆婆の魔法は既に解けていることなどが明かされる。しかし、“この世界のきまり”によって、いかに錢婆でも千尋を助けることはできず、両親を取り戻すこともハクを助けることも自分の力でやるしかないことが確認された。ただ、ハクとの出会いについては、錢婆が「一度あった事は忘れないものさ、思い出せないだけで」と言うように、記憶の深い所にしまわれており、思い出さないだけである。記憶痕跡として無意識界に繋がっており、千尋とハクとの過去の出会いが決定的となり、外傷体験となっているかもしれない。千尋はハクと両親を救うために行動を起こす。錢婆から、魔法ではなくみんなで紡いで編んだ髪留めを貰って今までの髪留めと取り替える。これは、一種のイニシエーションと考えられ、髪を結び変えることで、新しい人間に生まれ変わり、また新しい世界に入っていくことの儀式と思われる。10才の少女であるが、生理的变化としての第二次性徴としての生理の始まり（初潮）を暗示するかも知れない。児童期から思春期への発達的变化と考えられないだろうか。丁度そこへハク竜が現れることも、思春期の異性への憧れであり、まずは非現実的な対象である“竜”が現れたのである。錢婆が「グッドタイミングね」と言ったのは、その様な心理的状况を見事に言い当てていると思われる。錢婆にとっては、ハクは悪戯小僧ぐらいのものであって、ちょうど千尋の相手には良いぐらいに考えているのではないか。物語では、ついに湯婆婆の強欲と千尋の無欲（愛）が魔法を挟んでぶつかることになる。魔法を解くことは児童期から抜け出すことかも知れない。一方、ネズミにされた坊は約束で湯婆婆の所へ連れて帰らねばならない。しかし、坊はもう魔法が解けているにもかかわらず自分の意思で元に戻らない。少しは自分の足で立とうとしているのだろうか。坊にとっては今回の冒険で初めて自分の部屋から外の黴菌が一杯いる世界に出たことになるのだが。一方カオナシは錢婆の提案でここに残ることになり、自分を認め

てくれる対象が初めて現れたのかも知れない。そして、出発の前に千尋が自分の本当の名前が“千尋”であることを知らせると、銭婆は“自分の名前を大切にする”ように言う。ここでは千尋が魔法の魔法（少女時代）から抜け出し、自分らしく自立的に生きることの決心であり、宣言であり、それを褒め励まし育てようとする銭婆は母性性の肯定的な面を象徴しているのではないかと思われる。千尋は、銭婆を“おばあちゃん”と呼んでいる、これは魔法使いの銭婆ではなくて千尋にとって普通のお婆さんになったことを示しており、魔法が解けている証しである。

V. 魔法の謎

1. 遠い記憶

千尋がハク竜に跨がって湯屋に戻る。ハクに跨がって大空を飛ぶ気分の高揚から記憶が蘇って来る。竜に乗り空を飛ぶ感覚から水に揺られる体の感覚、そして角を握った時の感触から何か分からないが掴んだ記憶、水に流れるピンクの靴、伸ばした手、足が水に入っていく、そして水の飛沫、水の中を漂う自分などが外傷体験として記憶の底から浮かび上がって来る。母親から聞いた話しであっても体の感覚的な記憶痕跡として残っていたのである。それは、自分が落とした靴を拾おうとして川に落ち、助けられた体験であり、その川の名前が“コハクがわ”であったことを思い出す。まさに、それがハクの本当の名前であり、その名前を千尋が言った時、ハク竜の呪いが解けコハクという男性が現れる。最早ハク竜は砕け散り、コハクが現れ、コハクは“魔法による竜”に戻ることはない。コハクは救われ、後は豚になった両親を人間に戻すだけである。

2. 湯婆婆の謎

湯屋では既に千尋とハクを迎える用意が出来上がっており、千尋が両親を助けることが出来るかどうかの最大の山場に來たのである。千尋とコハクが橋の向こう側に下り立ち、湯婆婆と対峙する。橋は人工的なものであり、異質な世界の“こちら”と“あちら”を繋いでいる。“渡るか否か”，これは本人の決心がいることである。そして，“渡る”という行為は恐怖や不安に打ち勝ち自分

が経験しない世界に入ることの意味する。橋のこちら側に降りた二人には明確な意思が存在することの表れである。そして、坊を連れて戻るという約束が守られたことで対決の幕が切って落とされたのである。湯婆婆は自分の大事な坊が一人で立っているのに驚く、湯婆婆にとって坊は何時までも赤ん坊であって、存在の場は、あの部屋に象徴されるような現実感のない時間が止まった子宮の中のような状態以外に考えられないのである。コハクが、“坊を連れ戻すのと引き換えに千尋の両親を人間世界に戻す”という約束を守るように湯婆婆に迫るが、銭婆と同じように“世の中のきまり”で“謎を解かないと、魔法が解けない”，千尋も両親も人間世界に帰れないと突っ撥ねる。人間世界に帰ることは、神や魔物がたむろする非現実的ではあるが人間の持つ様々な欲望が支配する世界から、目には見えないが人を愛したり、自分を見失わない強い覚醒された意識の世界へと帰っていくことである。

その時、ここでも、千尋が湯婆婆を“おばあちゃん”と呼び、橋に一步踏み出す。“おばあちゃん”と呼ばれて湯婆婆もびっくりするが、これは千尋にとって“湯婆婆”もただの“お婆さん”になったことで、既に銭婆に対しした時と同じように、魔法は解けていることを表現したに過ぎない。湯婆婆が一瞬怪しみながらもそれに気付かないことは、銭婆とは全く対称的である。気付くかどうかは、“欲”に囚われないで人の心を理解できるかどうかにかかっている。気付かないまま湯婆婆は千尋に12頭の豚の中から父親と母親を1回で当てるという謎を出すのである。千尋は「…ん??」と一瞬困惑したが、確信をもって「(両親はこの中に) いない」と答え、魔法が解けるのである。が、なぜ両親がこの豚達の中にいないことが千尋に分かったのか、それは今までに述べてきたように、千尋にかかった魔法が既に解けており、真実が見えたからである。他の者たちには豚に見えても、千尋には豚の正体が見えていたと考えられるからである。そのことから湯婆婆が問題を出したときに豚ではなしに元の姿（蛙男と湯女）が見えていたので一瞬困惑したのである。千尋は謎を解き見事キマリを守って解放されるのである。これには千尋のひたむきで自分の気持ちに対する誠実さという性格傾向が大いに働いたと思われる。

VI. エピローグ（トンネルを出る）

1. 両親との再会

千尋はコハクと一緒に、最初に迷い込んだ道を逆に船着き場に戻って来る。魔法が解けて大川は元の草原になり、この世界から抜け出す希望へと繋がる。草原は恰もここに来た時のままの時間の連続性を保ち、千尋が体験した冒険も何もかもがなかったかのように、即ち一睡の“夢のように”消えようとしている。コハクはまだこの世界のキマリの切りを付けていないので一緒に行くことはできない。しかし、自分の本当の名前を見付けたことから人を支配するための魔法は諦め元の世界へ戻る決心をした。千尋は“後ろを振り向かず”前だけを見てトンネルに向かう。後ろは既に過去の世界であり、断絶した閉じられた世界である。“振り向く”ことは再び魔法の時間を開くことになり、元の現実世界に帰れないことを意味する。それをコハクは警告したのである。両親はこの魔法の時間の中に居たが全くの健忘状態で魔法の時間を体験したことの認識がないため、後ろを振り向いても魔法の時間は開かなかったのである。この断絶した時間体験が主人公千尋の“神隠し”になっていると考えることもできる。

両親は人間に戻っているが、二人とも今まであったことは全く記憶になく、つい先程の事のように思っている。再会前と同じで何の屈託もない。千尋が何ともないか聞いても全くの健忘状態で「だめじゃない、急にいなくなって」と言うぐらいに時間感覚が麻痺しているのか、それほど一瞬のことだったのか、魔術的で“夢”を見ているような感覚である。この一連の体験はやはり千尋一人のものであったことが強く推測される。しかし、この冒険物語は、いずれ千尋の閉じられた記憶として忘れ去られて行くであろうが、将来、コハクが再び何らかの形で千尋の男性性の形成に影響を与えながら登場することが期待される。

目の前に未来に繋がる異風の門のトンネルが開いている。トンネルはまさにタイムトンネルとなり千尋と両親は人間世界に戻ることになった。不思議なことは、トンネルが最初に来た時よりも古びていること、元の世界へのトンネルの出口が石組みで出来ていて入った時とは全く違っている、そして草も茂り、

トンネルへのアプローチの石畳が見えていたのに今は一面草が茂っている。また、車に木の葉がかなり舞い落ちていたり、周辺の木が鬱蒼と茂っている。さらに、車止めの彫り物が消えて苔むしていたりする。このような不思議なことは、時間が体験の量とマッチしないことを意味していて、千尋の見た“夢”の中の出来事と考えられる。千尋の乗った車がトンネルを後にし、鬱蒼とした森の道を外界に向かって、引っ越しのトラックが待つ新しい家に向かう。

このように千尋の冒険は、引っ越しという根柢ぎ体験からくる、何とも言えない不安感が古い記憶や少女期の童話の世界や憧れを材料にした夢として展開したと考えられる。千尋は新しい家に着いた時（目を覚ました時）、きっと後ろ向きの生き方ではなく、精神的にも最早児童ではなく思春期の少女となって、新しい世界に向かって一步を踏み出すことであろう。

[考察]

1. 仮説の分析

この物語を心理学的に分析し解釈する時、一つの仮説として『物語全体が10才の女児童が見た“夢”である』とすることを提案した。これは、題名の“神隠し”と繋がることで、自分の意思ではどうすることも出来ない、自我機能を越えた無意識に繋がる現象と考えられるからである。“神隠し”については次節で述べる。

この物語の基本的な背景は、ごくありふれたサラリーマン一家の都会から郊外への“引っ越し”である。

これから引っ越そうとする青い家が見える、道を一本隔てた場所から始まる。引っ越そうとする家は富の象徴であり、社会的名声や信用といった合理的で明確な価値判断を持つ自我意識の代表と見ることができる。一方、鳥居や石の祠、蒼古とした彫り物を付した柱といった物は合理的な判断を越えた人の深い心の層に浮かぶようなイメージである。その二つの世界が道を一本隔てて存在しているのである。主人公は真っ昼間後者の世界に引き込まれることになる。この現象は自我の機能する意識の領域から無意識へと入って行く、まさに“夢”の

現象であり、異風の門がその入り口となっている。そこに付いているトンネルが夢の世界への通路なのである。なぜこのような夢をみたのか、それは“引っ越し”という主人公にとっては一種の外傷体験になるかも知れない状況と符合すると考えられる。今まさに主人公は引っ越しの真っ直中にあるのである。

“引っ越し”というのはライフイベントの中で生活変動による外的ストレスとして非常に重要な意味を持つ^{注2}。それは、今までの自分の生活を根こそぎ刈り取るような喪失体験を伴うものだからである。主人公の年代（10才）では友達というものがいかに重要な意味を持つものであるか、その友達とも別れなければならない、生れ育った家、見慣れた風景、そこで生活している人達、そこからの分離であり、否応のない剥奪体験である。ひょっとすると外傷体験として心に傷を残すかも知れない程のものである。

これを、E.H. エリクソンは『根こぎ感』と呼んだが、日本語では“浮く”という言葉で表現されることがあり、妙木浩之は『周りから“浮く”ことは、周りに溶け込めない、あるいは馴染めないことであり、その人は何か逸脱の感じを持っている。何となく溶け込めないという不安や不満がそこにはある』^{注3}と指摘している。

この喪失体験から起こる不安が夢となって表現されたものが、この冒険物語であると考える。河合隼雄は、夢は『その時の意識に対応する無意識の状態が何らかの心像によって表現した自画像である』^{注4}、そして『内的なものと外的なものとの出会う接点として、つまり、外的なものを消化する働きと、内なるものを外に展開する働きの相互作用の結果として夢を考えるのが妥当であろう』^{注5}としている。河合に従えば、この場合、外的なものは“引っ越し”であり、喪失体験に伴う不安と10才の主人公の少年少女期から思春期に移行する時の身体的・心理的・社会的な内発的動機が相互作用によって、この夢（冒険物語）を見せたと考えられる。

物語の中では、不安はもっぱら主人公の主体性に関わるものであって、両親はその不安の表現の一つになっているにすぎない。それは、物語の出だしに端的に現れており、引っ越しによる気分が両親と主人公ではかなり違ったものと

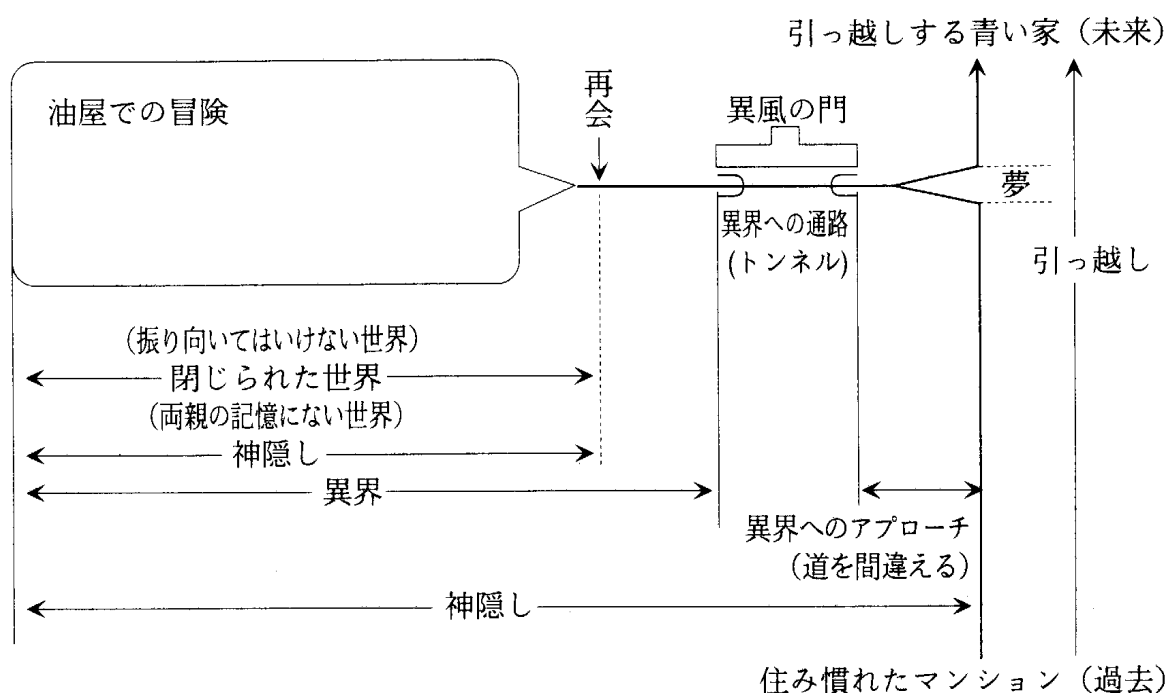
なっている点である。引っ越しは、両親にとっては十分納得のいく選択であり、自分自らが決定し選択した生き方であろうと思われる。しかし、子供である主人公にとっては自立的な選択は難しく、意思決定が他律的なものとなっていることが推測される。“根刮ぎ”^{注6}体験と呼んでもよいと思われる外傷的なものである。10才の女児童にとっては青年期に見られるような心理的社会的自立には至っていないものの、認知能力の発達に伴って親の期待を押し付けと感じたり、もっとこうしたいという自分の意見を持つようになり、自分の好みや意思がはっきりしてくる時期^{注7}である。当然不満も出てくるであろう。その様な心理的背景に立って、引っ越しを考えたとき、主人公にとっては、なかなか受け入れにくい部分もあり、新しい環境への馴染みのなさからくる不安も高いと思われる。その様な両親と主人公の気分の差が画面に現れているように思う。

その気分は、両親は軽いそう状態、それに引き換え主人公は、このように環境がごろっと変わる“根刮ぎ”体験による軽いうつ状態（引っ越し鬱状態）という心理的状态にあると考えられる。

2. “神隠し”の解明

文化人類学者で日本の各地を調査したり、文学作品等から『神隠し』という

図1 時間軸からみた“神隠し”



民俗事象を研究している小松和彦によれば、『神隠し』とは、「ある日、突然、子供が日常世界から消え失せてしまう“失踪事件”」^{注8}である。また、「神隠しにあうということは、失踪者が異界に去るということである」^{注9}「異界にいざなわれ、その世界を見たり、体験したりして、再び人間の世界へと帰還してくるという特別な体験である」^{注10}としている。しかし、「失踪したままついに戻らなかった神隠しや数十年間も姿を消したままふいに戻って来るという神隠しがある一方で、ほんの束の間の、例えば数時間とか一昼夜とか数日、長くても数週間という短時間の神隠しもあった。多くはこちらにある」^{注11}と述べている。これらの点から“千と千尋の神隠し”をみた時、まさしく10才の“千尋”が、ある日、突然、日常世界から消え失せ、異界で見たり聞いたり体験を繰り広げる事になり、最終的に人間世界に無事帰還することになっている。その失踪期間は、小松が言うように多くの例による短時間の部類にはいっている。更に「“異界”にとどまることは失踪者が異界の住人になるということでもあった。失踪が長引けば長引くほど失踪者は異界の『モノ』の属性を帯びることになる」^{注12}と指摘しているのは当を得ており、千尋が“異界”に安住せず、人間であり続け、人間世界に戻るという希望を捨てず、目的を持って生きることによって異界の『モノ』にはならなかったのである。そもそも現在では『神隠し』という民俗事象は消え失せたかのように思われているが、個としての人の深い意識や無意識の層には共鳴するものが、脈々と続いているように感じられる。それは、“神隠し願望”とでも言われる“家出願望”若しくは“冒険心”が少年少女たちには時代・文化を越えて存在する普遍的なものに思われる。日常世界とは違った見知らぬ土地に行って冒険してみたいという願望がそれである。その時、『神隠し』はその『通路』のようにイメージされる^{注13}との指摘は、千尋の発達過程と密接に結び付いており、このアニメがまさに冒険物語になっていることが証明している。

ここでは、“神隠し”を“物語全体が10才の少女の見た『夢』である”という仮説から解明を試みる。

図1は縦軸が時間軸で、「住み慣れたマンション」が過去に位置し、上に向

かって時間が流れて行く。そして、未来は「引っ越しする青い家」であり、その途中が「引っ越し」という布置にある。その間に主人公が車の中で“夢”を見る時間があり、物語はこの夢の時空の中で展開するのである。時間軸から左側への展開は、“夢”を見ている時間に主人公が体験した、現実ではない超時空間軸である。そして、これが取りも直さず広い意味での“神隠し”の正体と考える。

“神隠し”については、夢自体が現実から遊離する体験であって、異界での冒険物語が狭い意味での“神隠し”と考えられ、自我のコントロールが利かない世界である。その内容についてはまさに10才の女児童が見る夢であり、その年齢の心性が背景にあると考えられる。このように夢の中でも神隠しが起こるという二重構造を持っている。夢の中で、主人公が異界から抜け出し両親と再会し人間世界に戻って行く時、その異界は、振り向いてはいけない世界であると同時に両親にとっては健忘症によって記憶にない世界である。この時間が閉塞し“閉じられた世界”が“神隠し”（時間の裂け目）の世界である。後ろを振り向かないことは、閉じられた時間と空間を再び開かないことで、夢から覚め人間世界への生還につながる。そして、主人公が元の世界に帰るためにはこの世界に入った時間と今から出ていく時間を繋ぎ合わせる必要がある、そのためには“振り向いて”もう一度魔法の世界（時間）を開くわけにはいかない。映像として知覚的に時間を繋ぐために、“後ろを振り向かない”という動作で示されるのである。両親にとっては、異界は記憶になく全てが、覚醒した意識的な現実世界と認識されているため時間は連続している。現実へ戻る折り返し点となった、閉じられた時間との接点は両親との再会時点であり、異風の門のトンネルが異界への通路となっている。そしてトンネルを出た時はかなり時間が経ったように木や草が生い茂り、車止めの彫刻も無くなっている。この出た時の変化は時間が現実に近い、夢が覚めることの現れと考えられる。意識水準が上がってきて“(夢が) 覚めて見れば”はっきりと物の形が見えることを表していると思われる。トンネルから出て戻る方向ではより現実に近い状況で夢から覚めることが計られたのではないかと考えられる。同じ間違えた道であ

りながら、往路での見え方と復路での見え方で風景が変わっている。往路では異界への不気味さが、復路では覚醒した現実へのリアルさという違いが表現されている。復路では徐々に現実近づき、最終的に“目覚め”，不安夢から脱出することになるのである。北岡修は『「目覚める」という体験が、病者にとっても健康な者にとっても、現実の発見であり日常性への回帰でありながら、自然な目覚めはまた次の夢をみることでもある』^{注14}と述べている。夢から覚めることでもう一度現実に戻り、自我機能が活躍する現実でも時間が繋がる。“神隠し”から生還し、不安夢から脱出したのである。このように、“神隠し”は“夢”と“閉じられた世界”の二重構造をもったものであると考えることができる。

3. 不安と魔法

前提となる仮説から、この物語は夢であり、その原動力は不安であると述べて来た。その不安について考えてみたい。

不安には正常な不安と病的な不安があると言われる。清水将之はSullivanが指摘した『不安になるということは、従来の自己の態勢が脅かされる事態にほかならない。だから自己の限界において主体が被る態勢が、不安なのである』^{注15}と述べている。これはまさに、主人公の“引っ越し”という事態に伴う、自分ではどうしようもない、自己の判断や能力を越えた圧力であり、強い不安を引き起こすものであると考えられる。従って、この不安に対する対処が自己の態勢の変革を生み、成長に関係してくることが推測される。そこで更に、Sullivanによると、『不安は自己の限界において体験されるので、この不安を前向きに建設的に処理できるときは、むしろ人格構造の内部において不安の痕跡部分はしばしば貴重な成長部分に転化して、自己世界が拡大してゆく』^{注16}という自己体制の新たな展開への可能性という不安の持つ積極的な意味と、一方でそれとは反対に「不安を避けようとして、親しいものから不慣れなものへと移ることを拒否して、新しい可能性の利用を拒む限り、自由を犠牲にし、自分の自立性と自己認識は縮小してしまう」^{注17}という退縮への可能性を指摘している。これは物語の中の主人公の姿に象徴され、不安になるとすぐ泣言をいっ

て両親に助けを求めている今までの自分から「イヤだ。帰りたい」とは言えない新しい自分に変化して行く過程を見事に表している。清水将之は「自己の限界において体験されたこの不安を前向きに建設的に処理するときには、むしろ人格構造の内部において貴重な成長部分に転化し、自己世界が拡大して行く」^{注18}と述べている。不安が“泣き虫”であった主人公を鍛えて、物怖じせず、直面化を恐れない少女に変えた。

この主人公の行動は、May,Rが言うように、人間は『不安から遠ざかることよりも、むしろ不安を貫いて前進することによって、自己発展を達成するだけでなく、自己の活動世界の視野を拡大するものである』^{注19}ということを証明した。油屋で人として生き抜くために恐ろしい魔女に直接交渉して働く契約書を取り付けたり、白竜を救うために単身魔女の部屋に乗り込んだり、クサレ神を癒したり、カオナシに真実を見せたり、沼の底の魔女に会いに行ったり、最後には豚になった両親を救うために魔女と対決するといった、不安を正面から受けとめ立ち向かう姿勢を見せた。この事が、見る者に共感を与えたのである。

このような不安感を、作者は10才の少女のイメージとして、“魔法の世界”を背景とした“神隠し”として表現した。では、魔法の世界の『魔法』はどのような意味を持つのかを考察することにする。

物語の中で、主人公と同世代の少年少女が最も憧れるのは“ハク”であるという調査結果が出ている。それは竜の化身であり、魔法をよくすること、そして主人公を助け、最終的に魔法が解けて自分を取り戻すという変身願望が満たされることと、そのスマートさから来る万能感の権化を感じさせるからではないかと思われる。魔法使いというのは自分の欲しいことは即座に何でも適えられ、自分の意思で人も物も支配し操作できるという万能感をもたらす。これは思春期・青年期の夢であり、憧れである。ハクはこの万能感に取り憑かれ、“魔法使いになりたい”とあって魔女に弟子入りしたのである。

そもそも、この物語の世界が魔法の世界であるというのは、『幼児の全能的な知識が客観的現実在即しておらず、非合理的だ』^{注20}という意味で“魔術

的”であり、それは坊と坊を取り巻く環境（部屋）、そして昼から夜へと時間も人工的に操作できるということに象徴的に表現されている。このように魔法は、主人公の心性の奥深くに潜む幼児性に端を発し、それが実現する場として夢が機能している。S.Freud が“夢は願望充足である”と言っているのを思い出す。この様に、主人公は様々な登場人物によって年齢相応の現実吟味力を育てられながら、魔法の世界を支配する魔女と対決するのである。

この物語はよく計算されており、至る所に謎めいた情景や状況が設定されている。「千と千尋の神隠しの“謎”」という著書が出るくらいである。基本的な物理的背景は“引っ越し”であるが、その心理的背景は“魔法が解ける”話である。魔法に取り憑かれたハクを救い、魔法を掛けられて豚になった両親を元の人間に戻し、最終的に魔法の世界から抜け出すことである。そして、魔法の世界で主人公が受け止めねばならない発達の課題を年齢に見合った課題として解決しながら、真実に目を開き魔法を解いていく過程が冒険なのである。

4. 発達心理学的分析

次に、主人公について発達心理学的側面から考察を加えようと思う。まず、この女兒は10才で小学校4年生の中学年と考えられる。建設会社のサラリーマンをしている父親と専業主婦の母親、そして一人っ子の主人公の三人家族で、現在では一般的な核家族である。また、典型的な中産階級に属していると思われる。主人公は、特に変わった点も見られず、ごく平凡で自然な発達状態にあると思われる。

主人公の発達段階は学童期にあり、この時期は仲間関係とその遊びが発達に重要な影響を及ぼすと言われている^{注21}。特に小学校の中学年頃から、次第に同性同年齢の仲間を形成し、子供の社会的役割、地位の獲得、学習等が培われ、集団規範への同調、自他の異同の認識、自己尊重、大人からの自立、自己主張、協同と競争、責任と義務等を育成する時期^{注22}と考えられている。更に、この中学年の時期は、学校では安定しているものの内面的には難しい時期で、未熟さと大人の形式が融合した時期^{注23}といわれている。退行と心理的な背伸びが混在し、家出の空想や出自のことなどを漠然と考える時期でもある。また、社

会的な役割を認識し始める一方で、劣等感などが生じる^{注24}。エリクソンのライフサイクルから見ると、発達課題としての“勤勉性”の獲得と社会的危機としての“劣等感”の克服の時期である。一般的に、『この時期は、学校生活を通して勤勉さを身に付け、学んで物事がわかったときの満足感などを体験し、社会生活に必要な基本的なことを自分のものにしていくことが課題』^{注25}であるとされている。さらにこの時期の児童期では男子と女子で差が見られ、共に同性グループで行動する傾向はあるが、女子では異性や性について疑問や好奇心をいだき、同性同士でまとまりながらも異性を気に掛ける^{注26}とされている。また、男子より女子の方が元気がよい。そのことから、宗方比佐子^{注27}も女子の児童期においては、ライフサイクルからいって『自分のパワーを実感できるとき』であり、『有能感を育てる好機』と指摘し、『女性であることの自信と誇りを十分育てたい』と述べている。

河合隼雄は、“自己実現における「時」”として10才頃を飛躍の時として、その裏に潜む危険性を指摘している。『人生を自己実現の過程としてみると、それはつねに発展を求めてやまぬ動的なものではあるが、年齢的にある特定の時期において、このような傾向が強化される時が存在する』^{注28}として第一、第二反抗期以外に6才くらいと10才頃にも反抗期程顕著ではないが同種の時期が存在することに注意を向けた。自己実現のために外に向かっていったエネルギーが内的な発達の方向に流れる時がその時であり、『この時期に多くの人々が反社会的、あるいは非社会的な行動にでて、人をも自分をも困難に陥れる』^{注29}。このように自己実現ということから見たときに、“引っ越し”は、両親にとって一つの外に見える自己実現の具体化されたものであるが、この少女にとってはどうなのだろうか。内的な“自己”の発達とのバランスが重要であり、主人公の、この年齢でその“時”を向かえ、夢によってそのバランスが計られたのかも知れない。

一方、この時期は、第二性徴の発現という身体生理的な変化に、発達の早い者では突入する時期で、性的成熟へのとまどいと同時に否応なしに自己の性同一性の認識に直面させられる時期^{注30}である。個人差は著しく“前思春期”

と呼んでもよいように思われる。このように身体的・生理的な性的成熟への動因を背景に、より分化した自己概念を形成し充実へと向かう前の準備期間であり、次の“思春期・青年期”に入ると、親から独立して自分らしさを確立し、社会に対して主体的に関わっていけるようになることが課題となり、自己同一性の確立が本番をむかえる。そして、青年期も後期になると課題もより社会的な傾向を帯びて来る。この様に発達的に、いま主人公は人生の自己確立とその後の成人として自己実現が可能になる重要な時期である広い意味の青年期の直前に位置すると考えられる。

この様な発達的な位置付けの基に、主人公が、迷い込んだ異界においてどのように自立性を高め、自己世界を広げ、自己認識を深めていったかを検証しようと思う。主人公は10才の少女としてこの異界に入ることに感覚的なものではあるが不気味さや恐れを感じていた（これとは対称的な知的判断に頼る両親の在り様から感覚の鈍った現代人を連想させる）。主人公は、ごく自然に自分の感覚で異様さを感じとることができた。一方、外にはどのように映っていたかという、湯女のリンが言う「ドン臭いね」、そして湯婆婆が「グズで、甘ったれ、泣き虫、頭の悪い小娘」と言うように、甘えたで、ドン臭く、礼儀も知らず、働いたこともない、一人っ子として我が儘放題に育てられていたことが想像される。これらは主人公のこれからの課題であり、他人に依存せず、自己決定力を高め、忍耐と努力によって少々のことでは弱音を吐かない、そして利口さを身に付けることである。

物語の中で、異界という慣れない環境に入った時、まず自分自身をしっかり持つという自己支持力を高めることであった。そして年齢に見合った観察力で周囲をよく見る。自己中心的な今までの在り方では湯屋では生きて行けないことを経験する。怠けることはゆるされず、義務と責任がともなう“働くこと”のルールを身に付ける。それは（釜爺の言葉），“やり始めたら最後までやり遂げる”そして“一時の思い込みで人の仕事に手を出さない”。人に接する時にはそれなりの社会的な礼儀を払わなければならない。そして（リンの言葉），“人に教えを受ける時には返事と挨拶がきちっとできないといけない”

“世話になったときはお礼を言わなければならない” ことなどを習う。この時、もう今までのように世間知らずでは通らないこと（少しは社会性を身の付けること）を反省するのである。後は、失敗を恐れず、自分で決めて自分の運命を切り開く勇気を持つこと、多少ドジでも正面から取り組む素直さや一途な正直さを大切に育てることである。そして、真実の貴さ、無欲の強さ更には、断ることが出来る強さを体験する。しかし、物事には本音と建前があることを知るが、これはまだよく理解ができない。最後にリンが「セーン、お前のこと、ドンクサイって言ったけど取り消すぞー」と言ったように、“甘ったれでも泣き虫でもない自分の意思で少しは行動する少女” に成長していった。そこでは自分自身を信じることができる自分を見出だし、新しい環境にびくびくした以前の自分を卒業していく。また、少しだが他人に安らぎを与えることも出来ることを体験する。そして、まだ現実的ではない（対象が象徴的な“竜”）かも知れないが異性に対する憧れを感じ、形の無いもの（愛や信頼など）にも大切なものがあることに気付く。

このように、異界での体験を通して主人公はその発達課題を達成していったのである。そして最後に、この魔女の謎を解き魔法から抜け出すことは重要な象徴的意味をもっている。それは、幼児児童期の自己中心的心性から少しではあるが社会に触れることで他人との関係をはかりながら自分をコントロールすることを学び始めることで、少年少女期を抜け出し思春期に入るという発達心理学的な意味を敷衍していると考えられる。

5. 物語の心理的構造

物語全体が主人公千尋の心的世界の力動を表現したものととらえ、その力動から考えられる心理的構造を考察する。その手掛かりとして、主人公と関係を持つ登場人物として、二人の魔女、ハク、カオナシそして坊を取り上げてみようと思う。

まず、心理的構造を支える背景は異界である。その異界はトンネルを出た向こう側にある。異界と世間（日常世界）は夜になると大川で隔てられ、橋はなく、フェリーによって繋がっている。異界は夢の世界の無意識につながる世界

であり、大川のこちら側である世間はトンネルの外にある自我の活躍する意識の世界と考えられる。

そして、異界を背景に、支配者である魔女によって、少女は“名前を取られる”という一度は『死の体験』をしながら再び人間として蘇るのである。そもそも“名前を取られる”ということは人間としての“死”を意味すると考えられる。『千尋』は人間としての“生”，『千』は“死”を意味し、主人公は一度死ぬことで再び蘇り、次の発達段階や新しい人生に踏み出すのである。そう考えると、このアニメの題名が“千と千尋の神隠し”となっているのは（本来は“死と生の神隠し”として）極めて当を得ていると言える。

異界では魔女によって支配されている湯屋が舞台となる。その湯屋は一本の橋によってつながっており、そこを渡るのには覚悟がいる。人間は入ることができない。主人公が、そこに入り込む唯一の人間となるのである。そのためには覚悟を決めて橋を渡り、息を詰めて人間臭さを消さなくてはならない。湯屋は浮き世の神々の癒しの場所で、人間の欲で痛んだ心身を癒すのである。快楽が目的である。湯屋には“後楽”そして門のトンネルの上には“復楽”の額が掛かっている。つまり、お湯に入って癒されて、この異界を出ていく時の愉悅の体験が書かれているのである。そこで働く従業員は人間ではない、ナメクジやカエル、クモ等である。ハクに至ってもその正体は川の神である竜なのである。そして、人間と同じ欲望をもって働いている。それはこの湯屋を支配している魔女湯婆婆の強欲に通じるものがあり、湯屋が有料で神々から料金を取るところがおもしろい。

湯婆婆には双子の姉の銭婆がいる。この二人は、姿形が瓜二つであるが、銭婆が言うように“ハイカラでない妹とは気が合わず”，全く違った生活をしている。この魔女二人に象徴されるものは元型としての太母グレートマザー^{注31}の二面性であると考えられる。

この魔女は共に“母”ではない。主人公が「おばあちゃん」と言うように、祖母なのである。宮崎駿のアニメには、お婆さんはよく登場する^{注32}が母親は余り登場せず、登場しても役割もそれほどではない。C.G.Jung は『祖母は母

の母であって、母「より偉大」であり、まさに本来の「グレートマザー」なのである。祖母が智恵の特徴と魔女の特徴をかね具えていることはまれではない』^{注33}と言っている。この物語では、この祖母が 湯婆婆と銭婆の二つに分かれていて、しかも双子の姉妹という二個一組を生み出している。この二個一組が暗示するものは、『最初の分裂が生じ、原初の統一が失われ、代わりに相対性、依存関係、他者、対立の可能性などが入り込む』^{注34}。そして『自然界のあらゆる対立が生じる』^{注35}。その結果、『自然界の調和は失われ、肉体的、知的、精神的な生活の均衡と調和が崩れることは必至である。したがって、二つのうちのどちらかが抜きんでたり、抑圧されてはならない』^{注36}と、道教やタントラ教では人間の二元的な在り方に意味を与えている。この物語では本来は単子（一人）の魔女で済むところを、双子の魔女を登場させることで、主人公の心理面をより明確にしている。

ここで、もう一度論旨を戻して、太母の持つ意味から主人公の心理構造に迫ることにする。母性性にはすべてのものを生み出す豊饒の地とすべてを呑みつくす死の国への入り口^{注37}という二つの側面がある。その特性は、「母らしさ」、女性的なもののふしぎな権威、知性をこえた智恵と精神的高さ、親切な、保護し、担い、成長と豊饒と食物を与えるもの、不思議な変容である新生の場、助力を与える本能または衝動、ひそかな、隠されたもの、くらいもの、深淵、死者の世界、嘔み込み、誘惑し、毒を注入するもの、不安をかきたて、逃げられないものである^{注38}。魔女の姉の銭婆は優しい、許す、育てる、助けるといった母性性の肯定的な面を、妹の湯婆婆は怖い、滅ぼす、呑み込む、食ってしまうといった否定的な面を表現している。湯婆婆は魔法を掛けることで、今のままの主人公に止まらせ、あわよくば退行させた状態で支配しようとし、謎による不気味さを味わわせる^{注39}のである。一方、銭婆は糸を紡いでいるが、それは『あらゆる月の女神たちは、宿命の糸と人間を捕らえる生命の糸を紡ぎ、そして織る』^{注40}と言われるように、人間の運命を決めるのである。“紡がれた糸は、生命、時間、そして運命の糸”である^{注41注42}。ここでは銭婆が、運命の糸で編んだ髪留めを主人公に与える。これは“自分の運命を自分で決めなさい”

というメッセージであり、新しいこの髪留めに替える行為は通過儀礼イニシエーション^{注43}そのものである。“この儀礼を授けられる人は、春という児童期の呑気な人生を葬り去って、大人の成熟した人生を身に付ける。生まれ変わる二度目の時には、～地獄への降り道でもある暗闇へと入るが、これは死を超越して、新生へよみがえるためである”^{注44}。またもともと“髪には生命力が宿る。髪は、思考力と靈魂の力とされる”^{注45}とされている。物語では主人公は命をかけた湯婆婆との対決に向かうのである。人間への再生（新生へのよみがえり）のためである。湯婆婆と銭婆の二人の魔女に分離しているが、心理的には太母としての二面性を視覚的に表していると考えられる。そして、銭婆が主人公を助け切らない所に銭婆の智恵がある。このように、主人公は、太母の示す母性性の二面性を体験しながら、次に登場するハクという男性性に一見助けられながら、自分の力で運命を切り開き、自己認識を深めて行く。

ハクとの出会いは、この物語が始まるずっと以前、主人公が幼児の時に溯る。川に落ちた靴を拾おうとして溺れかけたのを、ハクに助けられたという過去の体験である。それが徐々に記憶の底から想起されてくる。外傷体験となって体の感覚が覚えていたと考えられる。主人公が「ハクとわたし、ずっと以前に会ったことがあるみたいなんです」と聞く場面で、銭婆が「一度あったことは忘れないものさ。思い出せないだけだ」と答えている。

外傷体験は誰でも体験することで、生きていることそのものが外傷体験の積み重ねと考えてもよいくらいである。ここでの主人公の外傷体験は、精神病的には決してストレス障害にまでは至っておらず、思い出そうとすれば思い出すことができるくらいの記憶痕跡となって意識の下の方に残っていたのである。この物語は夢であり、引っ越し不安がその引き金になったと述べたが、更にその深い所で、この外傷体験から来る不安が関わっていたとも考えられる。

さて、その“ハク”であるが、これは主人公の無意識内に集積され人格化された男性像と考えられる。それは“アニムス”^{注46}と呼ばれる心像である。前に“一見助けられながら”と言ったのは、逆にハクを助け、本来のハクらしいハクに成って行くのを助けたのは主人公に他ならないからである。それは主人

公の中に育って来た男性性が具体的なイメージを持って現れてきたことと並行している。E. ユングによれば^{注47}、このアニムスにも発達段階があり、どの発達段階に人格化されているかが意味を持つ。それは、①力、②行為、③言葉、④意味へと発達していく。アニマがエロスの原理を強調するのに対して、アニムスはロゴスの原理を強調する。第一段階の“力”は男性の力強さといわれ、肉体的な強さを示すものである。次の“行為”の段階は、“力”と区別しがたいが) 強い意志に支えられた勇ましい行為の担い手としての男性像によって表される。さらに、“言葉・意味”の段階として示される知的なロゴスの原理においては、鋭い切断の能力にあって、物事の差を明確にし、正誤の判断を下す能力に現れる。ここに登場する主人公は最初は状況判断もできず、釜場への道順も言葉で理解できないために映像で示されるといったことや、ハクが竜になって“魔女の契約印を盗む”、過去に“主人公を助けた”、“空高く飛ぶ”等といった“力”と“行為”の象徴であってまだ言葉で意味を表現するという“智慧”の状況に至っておらず、主人公の内なる異性であるアニムスは力や行為の段階にあることを示していると考えられる。「またどこかで会える」と主人公が聞くのは自己への問い掛けであり、将来、この“内なる異性”を育て、ハク竜ではなくハク男性に出会うことになると考えられる。

次に登場するのは“カオナシ”である。カオナシは自分というものを持たない、他人の欲を自分のものとして生きる他律的な存在である。それは日向に出れない“影”のような存在である。自分の言葉を持たず喋ることができない。表情の変化も殆どない。主人公に指摘されるまで自分の感情にも気付かない非常に未分化で影の薄い存在である。個性がなく、自覚的でないことは全身黒ずくめで、足がないこと、そして手は非常に貧弱であることに表れている。中でも足がないことは、自分の足で立つことができないことの象徴的な意味を表していると考えられる。他人の感情、特に金銭欲や食欲といった欲に気付き、その虜になっている者を飲み込むことによって、その欲求を自分のものとして自己の存在を確認することになる。その時は飲み込んだ者の声で話すことができたり、その者の手や足が現れたりする。カオナシは、最初から主人公に対して

著しい拘りを示し、いろいろな欲で誘い、その欲求を適えることで主人公の影になりたかったのではないかと推測される。しかし、カオナシは言葉や智恵には縁がなく、思考は苦手で感情と行動をモットーとすることから、主人公の言葉を理解し思考することが出来なかったのではないかと考えられる。これは、主人公が盟船に乗って湯屋を離れる時、「あの人、湯屋にいるからいけないの。あそこを出た方がいいんだよ」と呟いた。それは、カオナシが目に見える欲に自己の存在をかけることから、湯屋に居ると様々な欲に惑わされ自己を見失うことになることを知っていたからである。もともとカオナシは、湯婆婆が「ロクでもないもの」と言うように、人でもなく、神でもない、銭にならない厄介者という存在である。影は日向には出ることができず、普段はひっそりと目立たない存在である。しかし、影が纏まりをもったイメージに発達し、その中身に周囲が呼応する時、その存在が俄かに現実味を持ってくる。一度影が動き出すと“カオナシ騒動”でみたように欲求のままに恐慌を起こし、秩序は破壊される。影はC.G.Jungのシャドウという元型に通じるものを感じさせ、ここでは影を影として認識し、それに合った対処が必要であることが示されている。そして、銭婆によってその在り様の一つが示された。銭婆を手伝うことによって、人生の影という役割から運命の糸を織るというぴったりの仕事に出会ったのである。

“坊”については、嬰兒的な自己中心的心性から、自分の欲求はいつも満たされ、快不快に基づいて行動するものとして描かれている。自分で立つことも出来ず、外の世界を知らず、無菌状態で、しかも時間までコントロールされた世界で生活している。母親の子宮の中で生活しているようなもので、坊と湯婆婆の関係は母子一体感を象徴的に示していると考えられる。この平和な世界も主人公の“意識”というものが侵入し、しかも、外観からしか判断できない坊は、叔母である銭婆を双子の妹である母親と間違ったことから、二者の分離が起こり、その結果主人公と共に外の世界に飛び出し、共に冒険することになった。この坊の意味するところは、一種の退行ともとれる主人公の万能感のような幼児的心性を代表するものではないかと思われる。退行がいつも問題になる

わけではなく、本能的な欲求を感じさせ行動のエネルギーとなるような象徴的なものかも知れない。それは、銭婆によってネズミにされるということに表れており、冒険の果てに（外界と接することによって）自分の足で立つことを学び、それも主人公が謎を解くのを助ける力となったのである。

以上のように、物語として表現された夢の世界である異界における冒険は、“千尋”という少女が魔女によって名前を取られ“千”となり、再び人間としての“千尋”を取り戻すという死と再生の物語と位置付けられ、この体験を通して主人公千尋が成長して行く過程を示していると言ってよいと思う。その体験過程を、元型が活躍する無意識の精神世界の母性性や男性性、影、幼児性といったものとの関係から分析し心理的構造をみてきた。その結果、この夢全体が10才の少女のイニシエーションと位置付けることが出来るという結論を得た。この夢によって児童期の少年少女期を卒業し、次の思春期に入っていくことになると思う。

【おわりに】

今回、『千と千尋の神隠し』を心理学的な立場から、仮説を立てて考察を試みた。分析や解釈にかなり無理なこじつけや飛躍があったと思うが、一つの見方として提出した。

宮崎駿のアニメーションには、その作品に接した時、広く異文化を越えて人々の心のどこか深い部分に触れるものがあり、それはこの作品で証明された。ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞したことは“はじめに”でも述べたが、そのときの審査委員長のミラメナイール監督との対談の中で、『映画界がグローバル化しているが、そうした作品は文化の根を失い、魂がない。「千尋」は日本的であり、同時に宮崎さん独自の世界であり、無意識の悪夢のようなものも入っていて、普遍的な力がある』（朝日、H.14.4.10朝刊）と述べ、その普遍性と共通した無意識の作用を指摘している。更に、米ディズニー映画が米国での上映興行権を獲得し、英語の吹き替え版が出ることになったことは、この作品が日本の文化を越えて、意識から無意識への深い心の層の広がり、人類共通に存

在することを証明しようとしている。その心の深い所で共通に響くものが何か、発達心理学的側面や精神分析学的側面、そして精神病理学的な観点からも分析を行い、解析を試みた。

引用・参考文献

- ・ K. A. シグネル 高石恭子訳 女性の夢（こころの叡智を読み解く） 誠信書房1997年
- ・ 河合隼雄 心理療法とイメージ 心理療法3 岩波書店 2000年
- ・ 松本行弘 「父親不在状況での男性性獲得 その1
“もののけ姫”の心理学的考察を通して」
神戸親和女子大学児童教育学研究 No.17 '98.3
- ・ 松本行弘 「父親不在状況での男性性獲得 その2
“もののけ姫”の心理学的考察を通して」
神戸親和女子大学教育専攻科紀要 No.3 '98.3
- ・ 新聞記事 第56回毎日映画コンクール '02.1. 毎日新聞
- ・ 宮崎駿 「千と千尋の神隠し」 1～5巻
徳間書店 アニメージュ編集部・編 '01.9
- ・ テキスト構成吉野ちづる 「千と千尋の神隠し」 東宝株式会社 '01.7
- ・ 「千と千尋の神隠しの謎 登場人物と物語の秘密に迫る！」
Taco Studio 三笠書房 2002.1
- ・ 岡本夏木・他編 「意味の形成と発達 生涯発達心理学講座」 ミネルヴァ書房
第6章 女の子の育ち p125～p150 吉田直子
- ・ 清水将之編 「不安の臨床」 金剛出版
- ・ R.May 著 小野康博訳 「不安の人間学」 誠信書房 1963年
- ・ 桂載作 「ストレスケア ―東洋の療法における心身問題を含む―」
季刊精神療法 15(1) 1989年
- ・ 「ことばの心理学」 imago イマージョ 臨時増刊8 '92 Vol.3-9
- ・ 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集 「精神保健学」 へるす出版 1979年
- ・ 河合隼雄 「ユング心理学入門」 培風館 1984年
「内なる異性」 E.ユング著 笠原嘉・吉本千鶴子訳 海鳴社 1976年
- ・ C.G ユング著 秋山さと子編・解説 「ユングの象徴論」 思索社 1981年

- ・ ジーン・C・クーパー著 白下洋右・白井義昭訳 「シンボリズム 象徴の比較文化」
彩流社 1987年
- ・ 宗方比佐子 「女の子らしさ、男の子らしさ」 福村出版 1994
- ・ S. フロイド 安田徳太郎・安田一郎訳 「精神分析学入門」 角川文庫563
- ・ 新聞記事 朝日新聞2002年4月11日 朝刊
- ・ 新聞記事 毎日新聞2002年4月12日 朝刊
- ・ 小松和彦 「神隠し」異界からのいざない 弘分堂 1991年
- ・ 東村輝彦 「漂白の人間誌」「神隠しと心の病」ホミネース叢書 1995年

- 注1 松本行弘 「父親不在状況での男性性獲得」 その1, その2
- 注2 桂載作 「ストレスケア」
- 注3 イマーゴ 「ことばの心理」 p82
- 注4 河合隼雄 「ユング心理学入門」 p146
- 注5 河合隼雄 前掲書 p148
- 注6 イマーゴ 前掲書 p82
- 注7 岡本夏木 「意味の形成と発達」 p35
- 注8 小松和彦 「神隠し」 p10
- 注9 小松和彦 前掲書 p26
- 注10 小松和彦 前掲書 p12
- 注11 小松和彦 前掲書 p28
- 注12 小松和彦 前掲書 p26
- 注13 小松和彦 前掲書 p11
- 注14 イマーゴ 前掲書 p137
- 注15 清水將之 「不安の臨床」 p28
- 注16 清水將之 前掲書 p33
- 注17 清水將之 前掲書 p33
- 注18 清水將之 前掲書 p33
- 注19 R.May 「不安の人間学」
- 注20 イマーゴ 前掲書 p226
- 注21 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集 「精神保健学」 p23
- 注22 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集 前掲書 p24

- 注23 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集 前掲書 p26
- 注24 精神保健福祉士養成セミナー編集委員会編集 前掲書 p26
- 注25 岡本夏木 前掲書 p130
- 注26 岡本夏木 前掲書 p130
- 注27 宗方比佐子 「女の子らしさ, 男の子らしさ」1994 福村出版 p58-p72
- 注28 河合隼雄 前掲書 p236
- 注29 河合隼雄 前掲書 p236
- 注30 岡本夏木 前掲書 p133
- 注31 河合隼雄 前掲書 p95
- 注32 『風の谷のナウシカ』ではオオババ様, 『もののけ姫』では老巫女のヒイ様などで共に予言者で老賢者である。
- 注33 C.G.Jung 「ユングの象徴論」 p245
- 注34 ジーン・C・クーパー 「シンボリズム」 p169
- 注35 ジーン・C・クーパー 前掲書 p169
- 注36 ジーン・C・クーパー 前掲書 p170
- 注37 河合隼雄 前掲書 p90
- 注38 C.G.Jung 著 秋山さと子編・解説 「ユングの象徴論」 p90
- 注39 イマーゴ 前掲書 p190
- 注40 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 「シンボリズム」 p35
- 注41 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 前掲書 p17
- 注42 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 前掲書 p35
- 注43 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 前掲書 p136
- 注44 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 前掲書 p34
- 注45 ジーン・クーパー著 白石洋右・他訳 前掲書 p190
- 注46 河合隼雄 前掲書 p210
- 注47 E. ユング著 笠原嘉・吉本千鶴子訳 「内なる異性」 p9